

平成20年度財団法人東洋文庫事業計画書

財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

平成20年度財団法人東洋文庫事業計画の概要は下記の通りです。

事業目的

財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行う。

事業項目

- I 調査研究
- II 資料収集・整理
- III 研究資料出版
- IV 普及活動
- V 学術情報提供
- VI 地域研究プログラム

I. 調査研究

東洋文庫は、アジアを構成する諸地域の歴史・文化の発展に関する基礎資料を、組織的かつ継続的に収集してこれを広く内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、内外のアジア研究の進展に大きく貢献することを主要な目的としている。

東洋文庫はこの事業のいっそうの拡充に向けて、平成15年度以降、研究体制を一新した。すなわち(イ)研究員の編成において若手研究員の参加に意を注ぐとともに、(ロ)現代アジアの課題に多面的かつ総合的に取り組む方策を打出し、(ハ)欧文による成果の発信を拡充して国際的な活動を強化し、(ニ)研究情報および資料情報の公開と共同利用、内外にわたる情報の授受を促進すべく、研究部と図書部を一丸とした電子情報システムの構築に着手した。これを機に、研究分野は《超域アジア研究》と《アジア諸地域研究》に二分され、前者は現代アジアの学際的な動態研究、後者は各ディシプリンを生かした基礎研究に取り組む。

A. 超域アジア研究

1940年代以降のアジアは激変と急成長をとげ、21世紀の世界情勢の展望にとってアジアの占める位置と役割は高まりつつある。中国は1949年の革命ののち、急速な変容と発展を経過しており、中国情勢は国内問題に加えて、隣接アジア諸地域を包摂した課題として総合的・多面的な研究を不可避としている。また、イスラームのグローバル化とその先鋭化も近年の著しい現象であり、現代世界の理解のためには、中東や中国・東南アジアのイスラームの現実を柔軟に解析することが必要である。

このような意味で、現代の中国圏域およびイスラーム圏域に関するアジア研究を新たに組織し、これを政治学・経済学・国際関係論・歴史学などを融合した学際型のプロジェクト研究として実施する。

(1)「現代中国の総合的研究」(超域アジア研究部門、現代中国研究班プロジェクト研究)

本プロジェクトでは、20世紀後半において激変を経験し、東アジアから世界にまで政治・経済的な影響力をもちつつある現在中国の全容を、歴史・文化の要因を含めて総合的に分析する研究体制(政治と外交、経済、国際関係・文化の各グループ)を構築した。このための基礎資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点にしつつ、学際的研究・公開利用の観点から拡充と再編をはかる。

[研究実施計画]

- a) 政治グループでは、成果の刊行にむけ、これまでに実施した研究会における討論をふまえて成果刊行の準備作業を行う。
- b) 経済グループでは、平成 18、19 年度の研究成果として『歴史的視野から見た現代中国経済』を刊行する。また、南京農業大学が所蔵する 1930 年代の農村統計資料について調査を開始する。
- c) 国際関係・文化グループは、平成18年度刊行の『日中戦争期の中国における社会・文化変容』と平成19年度刊行の *Modern Asian Studies Review* No.3 に第1期の共同研究成果を発表したのに続き、太平洋戦争期から戦後における中国の社会と文化に関して、第2期の共同研究を継続する。

(2)「現代イスラームの超域的的研究－議会主義の展開と立憲体制に関する比較研究－」 (超域アジア研究部門、現代イスラーム研究班プロジェクト研究)

本プロジェクトでは、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討することを通じて、中東・イスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を総合的に考察する。

[研究実施計画]

「現代イスラーム研究班」では、平成17,18年度に刊行した成果(*Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly, A Guide to Egyptian Parliamentary Records*, 『トルコにおける議会制の展開ーオスマン帝国からトルコ共和国へ』)にもとづいて各国議会資料の分析をさらに進める。また、平成20年度に刊行を予定している3グループ合同の英文論文集 *Evolution of Parliamentarism in the Modern Islamic World* (Toyo Bunko Research Library [以下 TBRL] No.12)の編集準備を行う。

B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動態的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に強い影響力をもっている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を実施する。

<東アジア研究部門>

(3) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究—『水経注』の分析から—」

『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注を考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析することによって、中国古代の地域社会の構造を再検討する。

[研究実施計画]

- a) 陳橋驛『水経注疏』(江蘇古籍出版社)をテキストとして、隔週の研究会において、その巻17・18・19「渭水」(甘肅省に発し、陝西省咸陽の南、西安(長安)の北を経て黄河に注ぐ)の部分を用紙複製(’78年、1/100,000)の詳細なランドサット衛星地図および楊守敬『水経注図』と重ね合わせ、継続して諸注および諸校訂を検討している。平成20年度は昨年に続き巻19の講読を進める。
- b) 渭水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告を収集し、この地域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討し、渭水流域の歴史的な自然環境・社会的実態により具体的に迫るように努める。平成19年度には、これに中国人研究者・研究機関との学術交流や実地調査の成果も加え、『水経注疏訳注 渭水上』を刊行した。これに続き『水経注』19の訳注(下巻)の出版を準備する。

②「宋代社会経済史用語解の作成」

『宋史』食貨志の諸篇の訳注および『宋会要』食貨の諸篇語彙の索引カードの成果にもとづいて、宋代社会経済史研究の推進に寄与する《用語解》を作成し、データベース化して公開する。

[研究実施計画]

- a) 東洋文庫既刊『宋史食貨志訳注(一)～(六)』(昭和35年～平成17年)に収まる用語の注解、および東洋文庫の《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》事業(昭和39年～)で蓄積した索引カードを中心にして、宋代の経済史・社会史の研究に役立つ《用語解》を作成し

データベース化する。

- b) 上記a)のため、前年度にひき続き、収録語彙を選定し、各語彙に付する範疇別・時期別・地域別のサブコード、解説、用例、出典の注記法について準則を共有して作業をすすめる。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(Ⅱ)」

平成14～18年度にかけて、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として平成16年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)を、平成18年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、整理に手間取り、一部の遺物の調査・研究については、平成20年度においても継続実施する。

[研究実施計画]

- a) 平成19年度に引き続き、渤海・遼・金時代など、中国東北部を中心として興起した諸国に関する都城・城郭に関する研究を行う。
- b) 上記諸国と同時期における、同時代の中原諸国家の都城・城郭との比較研究を行う。

④「前近代中国の法と社会(Ⅱ)」

宋から明清時代にかけての戸婚・田土・銭穀などに関する法を明らかにし、前近代中国の「民事的」法の特質、歴史的変遷、地域性などを分析し、前近代中国の地方と中央政府との関係を考察することを目的としている。主として宋代以来の判例、契約文書を史料とするために、併せてこれらの史料の所在を調査し、蒐集する。

[研究実施計画]

- a) 従来の研究を分析し、今後の研究への展望を検討する。
- b) 「民事」的法、規範、契約文書などに関する研究文献のデータをとる。
- c) 国内外の判牘文集及び条例の蒐集を継続する。
- d) 研究動向を中心とした報告書、および研究文献のデータをまとめる。

(4) 近代中国研究班

①「1910～30年代における日本の中国認識」

(東アジア研究部門、近代中国研究班プロジェクト研究)

近代日本の官民様々な機関が作成した中国実態調査資料の検討を通して、日本の同時代中国認識を明らかにする研究の一環である。これまでに行った興亜院による戦時中国調査、及び第1大戦期青島守備軍による青島・山東調査などについての研究成果を踏まえ、満鉄や在中国日本商工会議所など各種機関による調査も含めて日本の華北調査の全容を明らかにする。平成20年度は、重要な資料について解題付き目録を作成しつつ、成果の刊行準備を行う。

[研究実施計画]

- a) 日本軍の山東占領期に同地域で獲得した経済的基盤がその後の華北における日本の進出とどのようにつながっていったかについて研究を進める。
- b) 関連する内外研究者との交流
 - i) 山東社会科学院などとの研究交流。
 - ii) 班員以外の研究者を交えた研究会の開催。

(5) 東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

京都大学附属図書館、天理大学附属図書館今西文庫をはじめ、日本各機関・個人が所蔵している、近世朝鮮文献記録の第二次調査を行なう。4年計画により、すでに出版した『日本所在近世朝鮮記録解題Ⅰ』の続編として、『日本所在近世朝鮮記録解題Ⅱ』の完

成を期する。従来、近世朝鮮のいわゆる朝鮮本と言われる古典籍については、総合的な調査が進行し、ある程度その全貌が解明されてきた。しかし主として成冊と言われる、帳簿を中心とした、地方資料・民間資料については、全体的な調査がほとんど行なわれてこなかった。第1次調査では、すでに該地にも残存が確認されていない資料について発見し、内容分析を行なってきた。第1次調査と今回の第2次調査によって、ほぼ日本における該資料は悉皆的な調査を行なうことができる。

[研究実施計画]

- a) 『日本所在近世朝鮮記録解題Ⅱ』の刊行にむけ、準備作業を進める。
- b) 調査資料の分析により、韓国所在資料と合わせて、近世記録の全貌を明らかにする。
- c) 該資料の日本への将来経緯について調査を予定している。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」

近年、中国・清朝史研究の分野では、満洲語で記された文書資料の利用が不可欠なものとなっており、当研究グループは、当該方面の研究の牽引車として国内外に認知されている。現在、我々のグループは、北京の中国第一歴史檔案館（檔案とは公文書のこと）に所蔵される「内国史院檔」と、東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗満洲都統衙門檔案」に関する研究をすすめており、前者については、ローマ字転写の上、訳註を施し、原文書の写真を付して、平成15年度に『内国史院檔 天聰七年』を、平成19年度に『内国史院檔 天聰八年』として東洋文庫から刊行した。現在は、同史料「天聰五年檔」の刊行に向けて、作業をすすめている。後者については、すでにその文書群の概要を、英文にて刊行したが、現在はその継続作業として英文による「研究篇」の編輯作業をすすめている。

[研究実施計画]

- a) 東洋文庫所蔵「鑲紅旗満洲衙門檔案」の整理・研究をすすめ、将来、英文による「研究篇」の刊行につなげる。
- b) 北京・中国第一歴史檔案館所蔵の「内国史院檔 天聰五年(1631)」をローマ字転写の上、訳註を施し、原文書の写真を付して刊行する。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」

ここでは、西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアに亘る大規模な統合を独自に進展・実現させて現在の「中国」領域を形成する軸となった、清朝の国家領域構造と対外関係を総合的に分析するべく、1932年以降の満洲国や現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりをも含め、清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築する。

[研究実施計画]

現代中国に直結する清朝の新たな総合的歴史像を提示する具体的作業を遂行する。

- a) 清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて個別に史料調査・現地調査を実施し(既に実施中)、それを基盤とする専門研究を深化させ、文献史料の調査・整理・分析を行う。
- b) 研究会やシンポジウムを催し、各専門研究領域の研究成果を持ち寄ってその意義と問題点を総合的に分析することで、清代諸領域の相互に亘る総合検討を進める。
- c) 平成18～20年度の3年間の研究成果として、平成21年度に英文論文集(TBRL No.14: *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era.* [仮題])を刊行する。

(6) 日本研究班

①「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。平成18年までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題（Ⅰ～Ⅴ）を公刊してきたことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施計画]

- a) 前年度に引き続き、岩崎文庫の中でも万葉集関係のものを中心とする木村正辞旧蔵書約100点について、書誌調査を行い、研究会を催してその資料群の全体像の把握に努める。
- b) 上記a)の成果を『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅵ』として公刊するため、編集作業を進める。

<内陸アジア研究部門>

(7) 中央アジア研究班

①「St.ペテルブルグ文書研究」

東洋文庫所蔵のマикроフィルム(ロシア科学アカデミーSt. ペテルブルグ東洋学研究所所蔵文書)のうち、ウイグル語・ソグド語・コータン語・マニ文字文献およびモンゴル語文献に関する解題カタログの整備をふまえ、ウイグル文献を中心に、文献学・言語学・仏教学・歴史学等の側面から個別に読解研究をすすめる。5、6世紀から15世紀にいたる中央ユーラシア資料文献学に欠かすことのできないこれらの資料は、小断片にいたるまで精査する価値をもつ。したがって資料使用の基盤を形成することがすべての基本となる。個別文書研究と全体像の明示とを並行してすすめていくことにより、出土地域の歴史像解明をはかる。

[研究実施計画]

- a) ウイグル文書を中心におこなってきた画像とデータベース上の目録とを組み合わせることによって、研究資料を充実させる。ただし、ロシア科学アカデミーとの契約により、画像資料は一括公刊することができないため、当面本研究グループ内部での閲覧を図ることとする。また、より解像度の高い画像データを整備して将来の研究に備える。
- b) とりわけウイグル文書は、他機関所蔵のものとの比較対象が必須であり、その総合カタログ化が必要である。個別文書研究をすすめ、必要に応じて現地での確認調査をおこなうと同時にウェブ上でデータ入手が可能なベルリン所蔵文書と、基礎データ収集が済んでいる大英図書館所蔵のウイグル文書をあらためてカタログ化する。同時に、ウルムチ・トゥルファン博物館が所蔵している新出土古文献について、中国側と共同研究を進める予定である。
- c) ペテルブルグ東洋学研究所所蔵ウイグル文献目録(増補版)刊行の準備を進める。

②「近現代中央アジアにおける民族の創成」

1991年のソ連解体と中央アジア5ヶ国の独立以来、現今のアフガニスタン情勢まで連動して、中央アジア諸国および、ヴォルガ・ウラル地域ではあらたな「民族意識」がさまざまな形で姿を現し、周辺地域(たとえば新疆ウイグル自治区)にも影響を与えている。このような現代中央アジアの動態を近年における東洋文庫の収集資料を活用して主に歴史学の方法によって検証し、「国民国家」の枠組みを問いなおしつつ、「民族」創成の多様な論理と過程を明らかにする。この地域に「民族意識」の原形が生まれたのは、19世紀末のことであり、これを創出したムスリム知識人たちはおもに新聞・雑誌などの新しいメディアを活用しながら民族的なアイデンティティの形成にあたった。したがって、19世紀末から20世紀初頭に刊行された新聞・雑誌は、重要な史料であり、これをもとに実証的な研究を進める。

[研究実施計画]

- a) 近代中央アジア新聞・雑誌コレクションの整理と研究を継続し、あわせて関連する新刊

資料・研究図書の収集にあたる。

- b) 国際研究集会の開催などを通して、中央アジア諸国およびヴォルガ・ウラル地域の研究者との国際共同研究を推進する。
- c) 研究協力者の参加を得て、本研究テーマに関する研究会を継続的に開催する。
- d) 日本における中央アジア史研究の成果を国際的に発信するために、インディアナ大学と協力して日本語論文英訳シリーズの刊行を準備する。

③「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

本研究は、これまで、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた中国の内地及び内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析研究することによって、諸民族の歴史の実態を明らかにすることである。このために、3世紀から13世紀に至る時代に作成された漢文文書を記述内容によって分類し、それぞれの文書がどのような特質をもっているかを、書誌学的・あるいは古文書学的に研究することによって、諸種文書の外形的な特徴、即ち、様式を究明するとともに、内陸アジア諸民族の歴史の実態を明らかにすることを期す。

[研究実施計画]

- a) ロシアのSt. ペテルブルク東洋学研究所所蔵の漢文文献マイクロフィルム108リール(Nos.256～363リール)の文献整理番号とその齣数とを示す対照一覧表について、昨年度に引き続き、既存の『俄蔵敦煌文献』(全17冊、上海古籍出版社)に収録された文献(図版)の所在(巻数・頁数)を明示した冊子本を作成するための最終的な校正作業を終える。
- b) 国内外の研究者の利用に供するため、上記a)の対照一覧表のデータについて点検作業を行なうとともに、構成メンバーの担当分野にかかわる漢文文書の重要なものを抽出し、その史料価値を究明する。
- c) 表記課題の成果を、平成20年度に『敦煌・トルファン等出土漢文文書の文献学的研究』(仮題)として刊行する。執筆予定者は20名である。

(8)チベット研究班

①「チベット蔵外文献の書誌的研究」

チベット蔵外文献については、河口慧海請来文献を含む東洋文庫所蔵チベット撰述文献の校訂とデータベース作成を行なうことにより、資料を整理し、その内容を明らかにする。また、チベット仏教宗義文献については、仏教の宗義を解説した宗義文献の校訂・翻訳・研究を行なうことにより、チベット仏教の思想を明らかにする。チベット語敦煌文献に関しては、マイクロフィルムで東洋文庫に所蔵されているスタイン蒐集敦煌文献を含む敦煌出土チベット語文献の校訂・翻訳・研究を行なうことにより、敦煌で栄えたチベット文化を明らかにする。

[研究実施計画]

- a) チベット人研究協力者の協力を得て、東洋文庫所蔵チベット蔵外文献の筆記体文書を活字体に直して校訂し、データベース化を進める。
- b) トゥカン著『一切宗義書』「カダム派の章」のテキスト校訂、翻訳作業を進める。
- c) 敦煌出土チベット語文献の解読と研究を進める。

<インド・東南アジア研究部門>

(9)インド研究班

①「南アジアにおける支配権カームガル支配に関わる文書史料の研究」

これまでムガル帝国の各皇帝の代ごとに歴史書、通史の検討を重ね、ペルシャ語の第一次史料を考察することを行なってきた。本研究では、とくに、ペルシャ語の歴史書とともに、ム

ガル帝国中央政庁から発行されたファルマンなど第一次文書史料を項目別に分け、調査・収集・整理し、検討をしていく。

[研究実施計画]

- a) 平成19年度に続いて、ムガル帝国中央から発行された皇帝のファルマンなど公的文書について、ヨーロッパの文書館などに保存されているものを調査して、マイクロフィルムなどで収集し、分析し、検討していく。
- b) 史料調査のため、海外の現地の文書館を訪れ、文書史料研究を行なう。
- c) 研究会を開催して、文献調査の結果を検討し、研究の成果を平成22年度に年に『ムガル帝国支配の文書史料の研究』(仮題)として公刊する。

(10) 東南アジア研究班

①「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

古くから東西海洋交易の要衝となった東南アジアの港市には、東西世界の商人が逗留するとともに、中国やインド、西アジアなどから多くの移住者が流入した。東南アジアの港市は、地元の人々をはじめ移住者や奴隷さらにはそれらの人々の間に生まれた混血者など、多様な人々が居住する空間となった。他方でこうした港市は、地元世界の外部への窓口となり、地域社会の結節点ともなった。本研究計画では、近代移行期の東南アジアの港市を取り上げ、港市住民がどのように「自分たち」と「彼ら」を区分したかを考察することで、彼らによる地元世界と広域秩序世界を構築するダイナミズムを探る。

[研究実施計画]

- a) 近代移行期の東南アジアの港市に関する文献資料の収集と分析を行なう。
- b) 東南アジアの主要港市を訪れ、外来系住民の居住空間の歴史的展開を調査する。
- c) 研究会を開催して文献調査や訪問調査の成果をもとに議論を構築する。その成果を、平成20年度に英文論集*The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries*(TBRL No.11)として出版する。

< 西アジア研究部門 >

(11) 西アジア研究班

①「イスラーム世界における契約文書の研究」

個人間の契約(売買契約など)にとどまらず、広く君臣契約や行政契約(徴税請負など)を含め、現存する文書や史料をもとに、オスマン文書とヴェラム文書を比較しイスラーム世界における契約を保証するシステムと契約によって結ばれる社会関係の全体像を検討する。

[研究実施計画]

- a) 前年度に引き続きイスラーム世界における契約文書の国際比較研究を、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の主催する「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」と連携して実施し、その研究成果『オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態』(仮題)を日本語・トルコ語で出版する。
- b) ヴェラム文書(東洋文庫所蔵、モロッコの羊皮紙契約文書)の研究を行い、平成21年度に研究成果の刊行を期す。
- c) 他機関の協同プロジェクト「中央アジア古文書研究」(京都外国語大学)、「イスラーム写本・文書の総合的研究」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)などと共同研究会を催し、イスラーム法廷文書にかかわる研究者のネットワークの構築を継続する。

C. 資料研究

(1) 東アジア資料研究班

現在、研究資料の収集のためには、内外の文献刊行状況、電子データの構築状況を随時把握することが必要となる。そのためには、各種の東洋学専門分野にわたり、海外の東洋学の有力機関と不断に交流を続けることが有効である。このたび東アジア資料の調査のため、新たに東アジアの専門家を結集して本部門を組織することとした。さしあたり、台北の中央研究院との間で締結された漢籍全文資料庫の運用、研究員の交換などを担当するほか、上海復旦大学、華東師範大学、上海図書館、北京社会科学院文献中心などとの交流促進の任にあたる。

D. 各種研究会・講演会開催

各研究班、グループにおいて、東洋文庫内外の研究者参加による研究会・講演会を開催する。

II. 資料収集・整理

超域プロジェクト研究・アジア諸地域歴史・文化の基礎研究ともに、図書委員会の協議によりアジアの現状および歴史に関する一次資料(写本、文書史料、刊本等)、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の補充に努める。中国雑誌については、CNKI(中国全土知識インフラデータベース)の政治・経済・法律・歴史・哲学・思想の部をインターネットアクセス方式で導入し、研究の利便性を向上させる。また、東洋文庫所蔵図書・資料は、部数約380,000件、冊数約940,000冊に及び、現在、書誌に関するデータベース化は95%(2007年12月現在)完了しているが、この整備をさらに推進し、広く一般の利用に供するために書誌データの加工作業を続行する。さらに、東洋文庫の蔵書のうち、欧文の稀覯書、貴重漢籍、また利用頻度の高い和漢書については、原本を補修すると共に、全文テキストおよび画像情報デジタル化を推進し公開するため作業を継続する。

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進める。

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進める。

C. 図書・資料データ入力数

新収資料の書誌入力および、所蔵資料の遡及入力作業を継続する。

D. 資料保存整理

外部業者による補修再製本、撮影・焼付作業を行う。

III. 研究資料出版

プロジェクト研究および基礎研究では、中国語・朝鮮語・満州語・ウイグル語・アラビア語・ペルシア語・トルコ語など、アジア諸語で記された文書・写本・刊本・地図などを用いて研究を行い、その成果を東洋文庫和文紀要・欧文紀要に掲載するとともに、和文・欧文の研究叢書

(「東洋文庫論叢」・「東洋文庫欧文論叢(TBRL)」)、訳注書、書誌解題などを単行本として出版する。これらの成果は、現代アジアの諸問題の解明に寄与するばかりでなく、国際的な発信を通じて国内外に大きな刺激をあたえ、アジア研究のさらなる進展に貢献するものである。

A. 定期出版物刊行

- ・『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第90巻第1～4号 A5判 4冊(編集・刊行)
- ・『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
No.66 B5判 1冊(編集・刊行)
- ・『近代中国研究彙報』第31号 A5判 1冊(編集・刊行)

- ・『東洋文庫書報』第40号 A5判 1冊(編集・刊行)
- ・『超域アジア研究報告』第5号 B5判 1冊(編集・刊行)
- ・*Asian Research Trends New Series No.4* A5判 1冊(編集・刊行)
- ・*Modern Asian Studies Review Vol.4* A5判 1冊(編集・刊行)

B. 論叢等出版

①TBRL10 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*

B5判 1冊(編集・刊行)

②TBRL11 *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries*

B5判 1冊(編集・刊行)

③TBRL12 *Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World*

B5判 1冊(編集・刊行)

④『前近代中国の法と社会に関する研究動向[付 文献目録]』

B5判 1冊(編集・刊行)

⑤『内国史院檔 天聰五年』

B5判 1冊(編集・刊行)

⑥『敦煌・トルファン等出土漢文文書の文献学的研究』

B5判 1冊(編集・刊行)

⑦『オスマン朝と中近世日本における文書史料の比較研究』

B5判 1冊(編集・刊行)

⑧『海野一隆氏著作集』

A5判 1冊(編集・刊行)

IV. 普及活動

春秋2期年6回の東洋学講座のほか、7回程度の特別講演会、談話会を開催する。

A. 研究情報普及

(1) 東洋学講座

(2) 特別講演会

(3) 談話会(東洋文庫研究会)

(4) 参考情報提供

『東洋文庫年報』平成19年度版

A5判 1冊(編集・刊行)

B. データベース公開

東洋文庫のホームページにおいて、図書・資料のデータ(日本語、英語)をアップデートし、公開する。

V. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

(1) 図書・資料の閲覧(協力)サービス

(2) 研究資料複写サービス

A) マイクロフィルム・紙焼写真

B) 電子複写

(3) 研究資料の覆刻・増刷の刊行サービス

東洋学報 第89巻4号	330部
東洋学報 第90巻第1～3号	各330部
TBRL9 <i>Memorial OJIHARA Yutaka-Studia Indologica</i>	30部
宋会要輯稿食貨社会経済語彙	100部
水経注疏積註	100部
内国史院檔 天聰八年	50部
トルコ議会資料の研究	30部
日本所在朝鮮近世記録類目録	30部
近代中国研究彙報 第30号	50部
東洋文庫書報 第39号等2件	各50部
東洋文庫年報 平成19年度版	10部

(4) 参考情報提供サービス

平成19年度版『東洋文庫年報』を刊行する。

(5) 広報普及

東洋文庫ホームページを随時更新する。

(6) 研究者の交流および便宜供与のサービス

A) 長期受入

1) 国内研究者の受入

光田 剛 (成蹊大学法学部教授)

「アジア革命としての中国革命」

(平成20年1月1日～平成20年12月31日・1年間,成蹊大学の依頼)

2) 平成20年度日本学術振興会特別研究員SPD・PDの受入

①SPD

野田 仁(東京大学大学院PD)

「カザフ・ハーン国の対外関係史の研究:18～19世紀の清朝との関係を中心に」

(平成19年度採用、同20・21年度・3ヶ年間)

②PD

河原 弥生(東京大学大学院PD)

「コーカンド・ハーン国期におけるフェルガナ・ムスリム社会の形成とイスラーム」

(平成17年度採用、同18・19・20年度

[平成20年2月1日より平成21年1月31日まで中断]3ヶ年間)

飯山 知保(早稲田大学大学院PD)

「士人層の変遷からみた金元代華北における社会統合と後世華北漢族社会形成の淵源」

(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

小笠原 弘幸(東京大学大学院PD)

「オスマン帝国における歴史意識－建国神話に見られる「起源」の記憶と創造の変容－」

(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

森山 央朗(東京大学大学院PD)

「10～12世紀の中東におけるウラマーと地方史人名録編纂の社会史的研究」

(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

小野寺 史郎(東京大学大学院PD)

「近代中国におけるナショナリティと政治的シンボル」

(平成19年度採用、同20・21年度3ヶ年間)

吉田 建一郎(慶応大学大学院博士取得)

「近代中国の卵、獣骨、皮革を中心とした畜産品貿易に関する総合的考察」

(平成19年度採用、同20・21年度3ヶ年間)

橋爪 烈(東京大学大学院PD)

「支配権喪失後のカリフの権威:軍事政権, アッバース家, ウラマーの視点による再考」

(平成20年度採用予定、同21・22年度3ヶ年間)

3) 外国人研究者の受入

Claus M. FISCHER (ドイツ連邦ゲッチンゲン大学教授)

「近世日本の古典芸能、特に歌舞伎史の研究」

(平成16年2月8日～同21年2月7日・私費)

Knost Stefan(フランス近東研究所)

「オスマン都市の自治的行政組織」

(平成18年11月1日～同20年10月31日・科学研究費補助金)

Christophe MARQUET(極東学院東京支部 代表)

「江戸中期・後期の絵入り本と画譜」

(平成16年9月1日～平成20年8月31日・フランス国立極東学院経費[東京支部代表])

B) 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行う。

VI. 地域研究プログラム

(1) イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

具体的には次の3つを柱とした研究活動を行う。

1. 現地語史資料の体系的収集
2. 文献情報ネットワークの構築
3. 文書史料による比較制度研究
4. 上記3を推進する上で、原典資料講読に関わる2つの研究ユニットを発足させる

(2) 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

中国研究に関するウェブやデータベースに関する情報を交換し、研究者の知見を広めるために、国内外の研究者・実務家を招いての国際シンポジウム及び小規模なワークショップを開催する。また東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会を継続して開催し、資料の読解能力を高め、若手研究者の養成をはかる(年数回)。また、データベースや文献資料以外に、現代史研究に必要な資料の史料学的研究を進めるセミナーなどを開催する。

平成20年度財団法人東洋文庫特別事業計画書

財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

平成20年度財団法人東洋文庫特別事業計画の概要は下記の通りです。

事業内容

I. 特別調査研究並びに研究成果の編集等

(1) 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

A) 平成20年度科学研究費補助金による事業

1) 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業

「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長:斯波義信]

分野:東洋学全般

本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所・図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約500,000件、冊数約1,000,000冊におよぶ大量の多言語資料を、書誌データのみならず、画像・地図などの画像資料、Video・DVDなど動画資料をふくむマルチメディア・データのレベルまで拡大してデータベース化し、これをインターネットを通じて、内外の研究者が自由に検索できるようにすることを目指している。

書誌データは1994年に入力を開始して以来、約10年を経て、470,000件に到達し、完成の目途がついてきた状態にあり、これを踏まえて、今後はデジタル撮影の手法によるマルチメディア・データの構築に重点を移したい。従来、岩崎文庫・モリソン文庫・梅原考古器物などは、マイクロフィルムによる複製保存を行ってきたため、現在まで約6,000件、1,000,000コマを越える貴重書フィルム(35mm)を所蔵しており、これをスキャナーにより画像をとりこみ全文及び器物データベース化を構築する。また、地図・絵画については最新技術によるデジタル撮影により精度の高い画像データベースを構築する。特にアクセスの多い動画データベースの充実を目指す。

2) 基盤研究(B)(C)の対象事業

①「古代インドの環境論」

[研究代表者:原 實]

(基盤研究(B)、平成18年度採択、4ヶ年間・第3年度目)

科学技術、機械文明の発達反面、自然破壊を結果し、近年生態系の変化や地球の温暖化が問題視され、人間とそれを取り巻く自然環境との共存が識者の注意を喚起するようになったが、この問題が古代インドにおいてどのように考えられていたかを検証しようとするのが本研究の目的である。

その最初の手がかりを古代インドの「不殺生」、東アジア仏教の「草木国土悉皆成仏」の概念に求め、人間に元来備わっていたはずであると思われる動物や植物に対する「慈し

み」の観念を[異国の古典]の研究を通して客観的に明らかにしていきたいと考える。

この趣旨に沿って関心を共にする同学の士を誘い、定期的に研究会を開いて意見を交換し、又、外国から専門家の来日を仰いで研究を進めて生きたいと考える。

②「宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化」 [研究代表者: 斯波義信]

(基盤研究(B)、平成19年度採用、4ヶ年・第2年度目)

本研究は、中国社会経済語彙の電子辞典化を狙いとし、手始めにその基幹をなす宋代史語彙を選定し、分析・解説を施し、データベース化を図るものである。われわれは中国经济史の基本資料に当たる13種の歴史正史の食貨志(経済・財政記録)の詳しい訳註を作成してきた。このうち最も大部な『宋史』食貨志篇の訳註成果は、逐次刊行の結果平成17年度に全6巻の完成を見た。同じく宋代の根本資料たる『宋会要輯稿』食貨篇については、年月日・詔勅、人名・書名、職官、地名の各語彙索引を順次刊行し、残りの一般語彙(経済・社会・法制・文書・難読語彙等)についてもすでにそのデータベースを構築した。

このような成果をもとに、『宋史』および『宋会要輯稿』の食貨篇から採録した語彙(前者1万語、後者9万語)について、語彙とその解釈を選定集成し、語彙解の編纂、電子化を図るものである。

③「敦煌・トゥルファン漢語文献の特性に関する研究」 [研究代表者: 土肥義和]

(基盤研究(C)、平成18年度採択、3ヶ年間・最終年度)

本研究は、旧来、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた敦煌・トゥルファンなど内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、各時代に現地で作成された漢文文書を分析することによって、諸民族の歴史の実態を新たに研究することにある。これに関連して、近年東洋文庫がmicrofilmで入手したロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク分所の漢文文書がどのような特質をもっているかについて、書誌学的古文書学的な整理と研究を、昨年度に引き続き研究協力者と共同で行う。本年度は試作済みの「サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献microfilm(107リール)文献番号・コマ数対照表」データベースをより完全なものにすること、およびそこから未公開文献を効率よく抽出して研究に供すること、この2つを目的とする。

3) 外国人特別研究員奨励費

「オスマン都市の自治的行政組織—タンジマート期以前のアレppo—」

[申請者: Stefan KNOST(学振外国人特別研究員)、研究代表者: 三浦 徹]

(平成18年度採用、3ヶ年間・最終年度)

B) その他の平成19年度研究助成金による事業

三菱財団人文科学研究費補助金の対象事業

①「中国社会経済史用語解釈(宋代篇)作成の研究」 [研究代表者: 斯波義信]

(平成17年10月～20年9月・3ヶ年間・最終年度)

中国社会経済史の研究が起って約100年に近いが、この研究の基礎をなす漢籍史料の校訂・読解・および必要情報の抽出という作業段階において、これを容易にする専門的な辞書・用語解がまだ整っておらず、研究の推進や普及を困難にしている。中国社会経済の用語は、用例・用法ごと、時期・地域ごとに多義かつ複雑であるのに、詳細な漢和辞書においてもまれにしか掲載していない。本研究はこれを打開するため、これまでに蓄積された用語知識を集成してデータベース化し、研究者が常備使用できる用語解を作成

することをめざし、とりあえずこれを宋代史について実施する。

東洋文庫では、創立期からの継続的事業の一つとして、中国経済史の基本史料に当たる13種の歴代正史食貨志(経済・財政記録)の詳しい訳注を作成してきた。このうち最も大部で、しかも元・明・清時代の制度や実体のルーツを記録する『宋史』の食貨志篇について、その訳注を逐次刊行し平成17年度にその完成を見るに至った。

そこで、これまでに蓄積された用語解釈を選定集成し、国内及び海外の宋代社会経済史の研究者が常時必携参照し、研究全体の推進に資すべき用語解の編纂を計画した。用語の選定範囲は基本的には『宋史』食貨志篇の各章とするが、各章の記述の源泉をなす『宋会要輯稿』食貨篇の語彙索引(現在同時推進、刊行中)及び専門学術書中の附註なども広く参照し、また各語彙の用例、用法、典拠史料、時期別、地域別の限定も付し、要するに実用的な辞書機能を帯びた用語解釈の集成を行うものである。この企画を実現し、さらに将来その成果を日本文・英文で刊行することに至れば、中国社会経済史の研究の推進と解釈の深化が大いに期待される。

②「清代諸領域の歴史的構造分析:総合研究

—清代東アジア・北アジアにおける政治・社会・経済・民族・文化の展開—

[研究代表者:石橋崇雄]

(平成18年10月～21年9月・3ヶ年間・第3年度目)

西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアには清朝による大規模な統合が実現した。しかも清朝の統合が現在の中国の領域を形成する軸となっているが、それは単に清朝の領土を継承したというだけにとどまらず、その政治・社会・経済・民族・文化の展開をも継承していることに大きな特徴がある。これらは全て、現在の中国分析に直結する研究課題であるが、その総合的な研究については未だ充分とはいえない現状にある。本プロジェクトは、中国内地の諸領域世界とその国家領域構造と対外関係を総合的に分析することによって、現代中国に直結する新たな清朝の総合的な歴史像を提示することを目的とする。その際、従来その歴史的な意義について十分に言及されてこなかった、1932年に中国東北部で造られた満洲国の位置付けの問題や、現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりについても、新たな具体像を提示したい。